

Title	アリストテレス,アヴィセンナ,トマス・アキノスの霊魂論比較研究：邦文要旨
Sub Title	Etude comparative de la psychologie d'Aristote, d'Avicenne et de St. Thomas d'Aquin (excertis from doctoral dissertations)
Author	牛田, 徳子(Ushida, Noriko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1969
Jtitle	哲學 No.54 (1969. 11) ,p.229- 234
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	博士論文抜萃
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000054-0229

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Étude comparative de la psychologie d'Aristote, d'Avicenne et de St. Thomas d'Aquin

(アリストテレス, アヴィセンナ, トマス・アクィナス
の靈魂論比較研究)

邦 文 要 旨

牛 田 徳 子

序論 アリストテレスにとって靈魂論は經驗的事実から出発する学問で、それ自身認識論的な問題を提起するものではなかった。それは靈魂という自然的客観存在の構成理論であって広義の自然学に属するものとされていた。アヴィセンナとトマスにおいても同じ方法がとられているのであって（たとえ前者において「空中人間」の比喩が暗示する靈魂の先験的自明性が指摘されているとはいえ）、結局アリストテレス的質料形相論に彼等がどの程度忠実でありえたかを検討することがこの比較研究にとって重要なポイントになる。

第 1 部 靈 魂 一 般 論

植物、動物、人間など一切の生命体の原理としての靈魂の三哲学者における定義が比較される。アリストテレスでは靈魂は自然的物体の形相因としてその生命の第一^{エンテレケイア}現実態であり、更に生命体の第二^{エンテレケイア}現実態にとって機動因、目的因ともなる。物体の生命形相としての靈魂一般規定は、生命者の重層的系列構造において靈魂が種差的内容のみを含んでおり、類的内容

を含む近接質料的物体と結合する自然的必然性(自然は飛躍せずの要請)を充分に加味するものとして打建てられたものである。

アヴィセンナでは靈魂は自然物体の第一完成因として規定され、内的形相因としてよりも類種系列の目的因として強調される。靈魂は物体の混合的素質に応じて相応の生命内容を与える原理であって、それ自体優劣の差ある系列を構成する。従って靈魂は物体基体の内容に係わりなく低次の生命種を構成する形相的完成因にもなりうるし、最も高次の生命種(人間)を構成する実体的外的完成因にもなりうるのである。

トマスでは靈魂はアリストテレスと同様、形相因として質料に内在し、その第一現実態となるが、しかし基体である質料を第一質料とする彼の質料論によって結果的にはアヴィセンナの目的論的靈魂構造に近付いている。すなわち生命者の類種系列はもっぱら靈魂自体の完全性の度合によってアプリアリに決定されるのに対して質料は完全性を全く欠除したものの、むしろそれを阻害するものであるというプラトンの觀念論が新プラトン主義の発出論を通じてアヴィセンナ、トマスの靈魂觀の根底に生きているというべきであって、これは下部領域の形相が質料的基体として積極的に上部領域の形相を制限することによって生ずる下から上への發展的系列を考えるアリストテレス的自然觀と対立するものである。

第 2 部 靈 魂 各 論

植物、動物、人間の各段階に固有な靈魂の規定が扱われるに及んで三哲学者の靈魂思想が具体的に現われてくる。三者にとって植物生命の基本的特徴は栄養性であり、その目的的特徴は繁殖性であり、成長性がその中間に位する。アリストテレスにとって生命体の不可欠の条件は栄養性であって、それゆえ栄養性が植性靈魂の第一現実態にもとづく本性上の定義になる。次に繁殖性が植物靈魂の第二現実態にもとづく適性上の定義になる。他方アヴィセンナにとって目的的な繁殖性の機能があつてこそ植物生命の

十分な実現があるとの見地に立ち、それゆえ栄養性、成長性のみならず繁殖性までも植物靈魂の本性上の定義に組込まれる。

次に動物靈魂の規定においても類似の対立がみられる。動物生命には感覚と運動の二大機能が属している。アリストテレスにとって生命体が動物たりうる不可欠の条件は最も基本的な触覚性であって、それゆえ動物靈魂の本性上の定義は触覚性のみで充分であった。これに対して他の高級感覚と運動性は動物靈魂の適性上の規定になる。他方アヴィセンナは如何なる場合においても目的的な運動の機能が動物種に実現してあらねばならないことを強調し、従って感覚性と運動性が動物靈魂の本性上の必要にして充分な定義とされる。

植物靈魂、動物靈魂に関するトマスの規定がきわめて曖昧であることが前者の対立を明瞭にさせてゆくに従って発見される。彼がアリストテレス主義、反プラトン主義を標榜しながらも彼の靈魂一般論において新プラトン主義の微妙な影響を受けていることから前二者の相違点を適確に理解するのを妨げられていたと云ってよいであろう。

最後に人間靈魂についてアリストテレスは人間を理性的動物と考えていたので、理性が身体の形相としてのその第一現実態である人間靈魂の定義になることは確かである。理性はこの意味で身体固有の機能である感覚と密接に関連するが、しかし他方それは身体の現実態に必しも限定されず反ってそれ以上のものである。ここにアリストテレスの提起した能動理性、可能態の理性、受動理性の役割についてさまざまな解釈が可能になる。

アヴィセンナにとって人間の知的靈魂はそれ自身実体であり、身体の外的な完成原理である。実践理性は身体を律してその完成因となり、理論理性はもっぱら可能理性として、離存する神的な能動理性から流出する知的形相の受容器となり、自らを完成する。従って理性靈魂は身体との偶有的な結合によって一時失われた自らの現実態を身体の意識的支配と知的淨

化によって回復すべきものなのである。

トマスはふたたびアリストテレスの立場にもどって理性靈魂を身体の形相としてのその第一現実態と説く。彼によれば能動理性と可能理性は理性靈魂に固有な認識機能の原理にすぎず、身体と同時に可滅的な受動理性は知性化された人間の感覚にすぎない。それゆえ理性靈魂は自存するに足る現実態をもちつつ同時に身体の現実態であり、身体の個別性に基いて個別化されるのである。

トマスの説はアリストテレスにおいて最も不明瞭である人間靈魂の問題に質料形相論の合理的な適用を可能ならしめる途を開いたといえる。すなわち身体の第一現実態に該当する理性の部分を受動理性が表わし、身体を上廻る靈魂固有の第一現実態に該当する理性の部分を能動理性の機能が表わすといえる。ところがこの理性靈魂の完成である第二現実態に対しては、第一現実態たる能動理性といえども可能態であってこの限り人間理性はもっぱら可能理性にとどまるのである。

しかしながらトマスは人間の理性靈魂のうちに身体基体に属すべき物体性、植物性、動物性までも形相内容として吸収する第一質料説を採ることによって、人間靈魂の唯一性、死後の状態の問題などに関してアヴィセンナと共に難点を避けられないのである。

第 3 部 生命機能論

各種靈魂についての経験的記述で始まる生命機能論ではアリストテレスが殆どその要素を提出し、後二者がそれぞれ分析、補足、発展を試みているところに特徴がある。

植物機能たる栄養作用では生命個体の量的保持、成長作用では個体の量的拡張、繁殖作用では種の時間的拡張が認められる。

次に動物機能としての意欲的な運動作用に関しては、アリストテレスは動物の感覚機能にすでに対象、外界の適不適の判別機能を帰しているが、

トマスは動物の欲求的傾向は感覚を通して対象の外在的形相によって規定されるといふ。アヴィセンナは動物の欲求と運動との間に「決断」の介在をみとめ、自然的選択能力としての本能をみとめる。

次に感覚機能としては五感としての外感と対象から切離されたかぎりでの内感がある。外的感覚の機能的構造についてはアリストテレスがかなり明晰に分析を行っているが、内的感覚の分類、分析についてはアヴィセンナにおいて著しい。特に彼の評価能力についての記述は動物生命との関連において動物の真偽判断力、行動、適性、反省力などの問題に興味ある論点を提出する。

最後に理性機能に関してその主要なものは普遍者の感覚的表象からの抽象である。しかしアリストテレスの抽象作用の説明は機械論的感覚主義であったので、アヴィセンナはむしろそれと対立的な仕方で、抽象とは普遍者が靈魂内の表象を機会原因として離存的な能動理性から流入することと理解した。しかしトマスは質料形相論を展開して、人間の能動理性は事物からの表象を自らの非質料的本性に同化せしめて知的形相たらしめる第一原因であり、非質料化された事物の似像は今度は可能理性を自らに同化せしめる第二原因になると説く。かくてアヴィセンナで先験論に一転した抽象理論はふたたび経験論に復帰したのである。

アリストテレスは人間理性の完成段階を三分し、純粋な可能態、可知物ハビトゥスの所有態、可知的理性の自己認識とした。アヴィセンナとトマスはこの第二段階の所有態は第一可知的原理の獲得から始まるとするが、前者はそれを能動理性からのアプリアリの流入とし、後者はそれをもアポステリアリの抽象によるものとする。さらにアヴィセンナは演繹推論の中概念のごとき第二可知物すらも流入的直観に依ると考える。いずれにしても理性は必然論証的エビステメー知識を獲得することによって遂に最終段階である獲得理性に達するという。

理性にとって知識の獲得は可能態にあった理性の現実態化であり、それ

の完全な終局は理性の完成、即ち完全な第二現実態化である。このような獲得理性が自己認識であるといってもアヴィセンナとトマスとは異なった仕方で理解される。アヴィセンナでは人間理性が獲得理性に達したとき自らの本性が自体的に可知的となり、知るものと知られるものの区別のない完全な自己同一がなりたち、そこで自己認識が実現するという。トマスでは獲得理性の完全な現実態とはあくまでも知ることの、いわば第二現実態であって、けっして本性上の純粹現実態を意味していない。従って人間靈魂の自己認識は他者の知的形相を通じて間接的にアポステリオリに遂行される他はないのである。それに反してアヴィセンナの自己認識は本性の神化に通じ、その背景に質料を超えたものに自他の区別を一切認めない新プラトン主義的な同一哲学が看取される。